# 令和５年度　学校経営計画に対する最終報告書

石川県立鹿西高等学校

| 重点目標 | 具体的取組 | 実現状況の達成度判断基準 | 集計結果 | 分析及び改善策（成果と課題） |
|---|---|---|---|---|
| 1 学習習慣の確立と教科指導力の向上<br><br>・学ぶ楽しさや充実感、達成感の得られる授業を展開し、生徒が自ら計画を立て進んで学習に向かう力を育成する。<br><br>・生徒の学習状況を把握し、個別指導、習熟度別指導や学習方法の指導を効果的に取り入れ、学習内容の着実な定着と学力向上に努める。<br><br>・若手教員早期育成プログラム、中高連携（中能登中学校との学習交流会等）、他校への授業参観、大学入試問題研究の推進等により指導力の向上に努める。<br><br>・GIGA校内研修推進リーダーを中心とした校内研修を通じて一人一台端末を生かした授業改善に取り組み、生徒の学びの質の向上を目指す。 | ①研究授業・相互参観授業並びに協議会を計画的に行い、全教員の組織的な授業研究によって、思考力を高める授業を展開する。 | 【教員】思考力・判断力・表現力を育成する学習活動を取り入れた授業は全授業回数の４割以上であると答える教員が<br>A　６０％以上<br>B　５０％以上<br>C　４０％以上<br>D　４０％未満 | B<br>（５１．８％） | 新学習指導要領で求められている思考力・判断力・表現力を育成する学習活動を３割以上取り入れている教員がほとんどではあるものの、４割以上取り入れている割合はおよそ全教員の半数であり、まだまだ改善の余地がある。今の時代に求められている力の育成に向け、相互授業参観の機会を増やし、授業改善を積極的に行っていく必要がある。 |
| | ②生徒による授業評価結果を授業改善に生かし、学習意欲と学力の向上につなげる。 | 【生徒】授業が動機づけとなり意欲的に学習に取り組んでいると答える生徒が<br>A　９０％以上<br>B　８０％以上<br>C　７０％以上<br>D　７０％未満 | A<br>（９２．３％） | 近年は高水準のアンケート回答が続いている。授業での学習内容及び学習活動が理解でき、ICT機器等の効果的な活用や、授業展開の工夫等により、意欲的に学習に取り組めていると思われる。今後もさらなる授業改善を行いたい。 |
| | | 【生徒】授業内容を理解できると答える生徒が<br>A　９０％以上<br>B　８０％以上<br>C　７０％以上<br>D　７０％未満 | B<br>（８８．６％） | 多くの生徒が授業内容を理解できると答えている。教員の授業改善の成果であると考える。生徒一人一台端末の配置により、視覚的な提示がしやすくなったことも一要因である。残り約１割の生徒の対応も今後、考えていく必要がある。 |
| | ③家庭学習時間や出席状況を把握し、その調査結果を全教員が共有し、生徒個々への指導・助言・相談に携わる。 | 【生徒】目標家庭学習時間を達成した生徒が<br>A　５５％以上<br>B　４０％以上<br>C　３０％以上<br>D　３０％未満 | C<br>（３２．８％） | 11月の新人大会後～12月の期間、毎日の生徒の記録からの集計結果である。上半期と同じく、3年生や定期考査前は達成率が5割～6割と高い。<br>R5の上半期や昨年の同時期と比べても、わずかではあるが学習時間は伸びており、教員の働きかけによる成果が出ている。今後も日々の細やかな学習指導や進路に関する指導を通して生徒のモチベーションを高め、家庭学習習慣を確立させていきたい。 |
| | ④校内研修推進リーダーを中心に、校内研修を通してICT活用指導力の向上を図る。<br>教員総合研修センターでの希望研修の受講を奨励する。 | 【生徒】授業でICT機器を用い、学習効果があがっていると感じる生徒が<br>A　９５％以上<br>B　９０％以上<br>C　８５％以上<br>D　８５％未満 | C<br>（８７．９％） | 生徒もICT機器の活用に慣れ、学習効果が確実に上がっている。<br>教員は今年度も相互授業参観や教員総合研修センターの研修等を通し、有効な活用方法を学んだ。<br>今後は、さらに探究的な学びができるような問いを設定することで、主体的で深い学びに繋げていきたい。 |
| 学校関係者評価委員会の評価 | | 震災等による授業数減少など、思考力・判断力・表現力を育成する学習活動を60％以上にすることは難しいとは思うが、引き続き60％以上を目指してもらいたい。子ども達が意欲的に学習に取り組んでいることから、これまでの指導の結果が出ていると感じる。コロナによる休校の経験から、今回の震災でもICTが活用されており良い。 | | |
| 評価結果を踏まえた今後の改善策 | | 発災２週間後から段階的にオンラインでの授業を進めた。双方向のやり取りができるよう環境整備も行った。今後も思考力・判断力・表現力の育成に向けた授業力（効果的にICTを活用する力）の向上に努めたい。 | | |

| 重点目標 | 具体的取組 | 実現状況の達成度判断基準 | 集計結果 | 分析及び改善策（成果と課題） |
|---|---|---|---|---|
| ２ 豊かな人間性の育成、健康や体力の増進、たくましい人づくりの推進<br>・健康で安全な生活を送るための基本的な生活習慣を確立させる。<br>・生徒会活動や学校行事、部活動、ボランティア活動を通して、豊かな人間性や社会性を育む。<br>・生徒理解を深め、いじめ・暴力・ネットトラブル等の問題行動や不登校の未然防止と早期の対応に努める。 | ① 日常での遅刻、服装、マナー等に関する基本的生活習慣の指導を全教員で行う。 | 【生徒】頭髪服装検査において、再検査指導を受ける生徒の割合が<br>A　１０％未満<br>B　１５％未満<br>C　２０％未満<br>D　２０％以上 | A<br>（９．５％） | 下半期の頭髪服装検査が実施できていないため、判断基準の数値は上半期のものである。大半の生徒は基本的生活習慣が確立できており、指導を要するような生徒はほとんどいない。身だしなみについては、気づいた教員がその場で声を掛けるよう、呼びかける。 |
| | ② 感染症対策の徹底のため、保健衛生環境の整備を全教員で行う。 | 【教員】感染症対策について、校内で意識的に取り組んでいると答える教員の割合が<br>A　９０％以上<br>B　８０％以上<br>C　７０％以上<br>D　７０％未満 | A<br>（９６．５％） | コロナ感染症は5類に移行されたが、インフルエンザ等様々な感染症対策として、教室の換気の徹底、空気清浄機の常設など基本的な感染対策は、教育活動を妨げない形で必要であると考えられる。感染状況に応じ、必要に応じた感染対策を今後も引き続き取り組んでいきたい。 |
| | ③ 鹿高祭、校内球技大会、校内合唱大会等の学校行事を通して生徒の自主性・協調性を育成する。 | 【生徒】行事に対して満足感・達成感を持っている生徒の割合は<br>A　８５％以上<br>B　７５％以上<br>C　５５％以上<br>D　５５％未満 | A<br>（９１．２％） | 昨年の鹿高祭アンケートの結果から、1･2年生にも模擬店などを出店してもらったことが高評価につながっている。引き続き、生徒に自己決定の場を与え、共感的な人間関係を構築できるような行事運営を心掛ける。 |
| | | 【保護者】子どもが学校生活を意欲的に送るようになったと答える保護者が<br>A　８５％以上<br>B　７５％以上<br>C　５５％以上<br>D　５５％未満 | A<br>（９２．３％） | 各課、各学年での取り組みが高く評価されている。今後も、生徒一人ひとりの参加意欲が高まり、保護者の理解が得られるような生徒会活動を目指す。 |
| | ④ 部活動では健康・安全面を考慮し、有意義で充実した活動を行う。 | 【生徒】充実した部活動を実践していると感じる生徒が<br>A　８０％以上<br>B　７０％以上<br>C　６０％以上<br>D　６０％未満 | A<br>（８３．５％） | 生徒が主体的に取り組んでいる部が多く、ここ数年は高い評価を得られている。今後も生徒が主体的に活動するような部活動運営となるよう各部の顧問に呼び掛けていきたい。 |
| | ⑤ 問題を抱えている生徒に対して、生徒課・保健課・教育相談室・担任・学年主任を中心に全教員で連携し、解決にあたる。<br>悩みを抱える生徒の早期発見早期対策を行う。 | 【教員】各課・学年と連携がとれて、問題を抱えた生徒の早期把握と対策がとれたと答える教員が<br>A　７０％以上<br>B　６０％以上<br>C　５０％以上<br>D　５０％未満 | A<br>（７５．９％） | 問題を抱えた生徒の相談窓口として、各担任、教育相談室、養護教諭等が機能的に連携し、生徒の気持ちを尊重しながら、各課、学年が情報を共有し早期の対応を心がけている。抱えている問題を生徒が相談しやすい関係構築や組織としての支援体制の充実が必要である。 |
| 学校関係者評価委員会の評価 | | すべての項目がＡ評価で素晴らしいと感じる。今回の震災により精神的なケアを必要とする生徒もいると予想される。専門家等とも協力して、必要なケアをしていって欲しい。 | | |
| 評価結果を踏まえた今後の改善策 | | 生徒一人ひとりのニーズに応えられるように、また一人ひとりの居場所を確保するために、委員会活動やボランティアなどだけではなく、専門家との連携をはじめとして、その他様々な活動を支援し、自己肯定感を与えられるような場を設けていきたい。 | | |

| 重点目標 | 具体的取組 | 実現状況の達成度判断基準 | 集計結果 | 分析及び改善策（成果と課題） |
|---|---|---|---|---|
| ３ キャリア教育の推進と進路指導体制の確立<br><br>・地域と連携した総合的な探究の時間等を通して、ふるさとや将来について考える機会を持たせ、主体的な進路の選択能力を育成するとともに、課題を発見し解決していくための資質・能力の育成を目指す。<br><br>・読書活動、進路学習、講演会、面談指導等を通して明確な進路目標を持たせ、進路実現を目指す態度を早期に実現する。<br><br>・教職員間の連携・協力を密にし、指導方法や指導体制を工夫して、３年間を見通した進路指導体制を構築する。 | ①定期的な進路情報の提供に努め、大学見学会、進路希望別説明会、保護者懇談会、コース選択説明会、卒業生と語る会等進路ガイダンスを充実させる。<br><br>面談等により生徒の進路意識を高揚させ、積極的に進路実現を目指す態度を育成する。また、必要に応じて教科担当者の面談も行う。 | 【教員（担任+進路指導課）】<br>生徒の進路実現に向けた意欲が高まるような進路ガイダンスを行っていると答える教員の割合が<br>A　８５％以上<br>B　７５％以上<br>C　６５％以上<br>D　６５％未満<br>※進路ガイダンスには、個人面談、奨学金説明会、大学見学会、各学年集会の進路説明会、コース選択説明会、卒業生と語る会等を含める。 | A<br>（１００％） | 担任が文理選択やコース選択をきっかけとした個人面談と、各生徒の実態に応じた進路ガイダンスを丁寧に行った結果であると考える。今後は進路実現の意欲の高まりをもとに進路実現に向けたサポートを全教員がとれる体制を整えていきたい。 |
| | | 【生徒】自分の進路希望を実現させるために必要な情報が何であるかをわかっている生徒の割合が<br>A　９０％以上<br>B　８０％以上<br>C　７０％以上<br>D　７０％未満 | B<br>（８８．２％） | 3年生の評価が98.0%と高くなっているが、1年生の評価は78.3%と低くなっている。3年生では目の前の進路に向け、各生徒の実態に即して行えていることが要因と考えられる。生徒の進路意識を高めるためにも１年時から対話をより増やして考えるきっかけを与えていきたい。 |
| | ②「総合的な探究の時間」の活動を通して、ふるさとや将来について考え、主体的な進路の選択能力を養う。 | 【生徒】取組によってふるさとや将来について考えられたと答える生徒の割合が<br>A　９０％以上<br>B　８５％以上<br>C　８０％以上<br>D　８０％未満 | A<br>（９４．３％） | どの学年も94%前後と多くの生徒が考えを深めることができた。実際にフィールドリサーチへ出かけ情報を集める点が中学校とは異なっており、その活動を通して、1年生はグループ、2年生は個人で取り組むが外部の人と係わることで地域や自分の将来について考えるきっかけとなっているからだと思われる。 |
| | ③朝読書や学級文庫等で、読書意欲を喚起し、読書の習慣を身につけさせることで、自分自身を見つめながら自己の将来についても考えることができる生徒を育成する。 | 【生徒】読書は進路について考えたり、社会や自分をみつめたりするうえで有意義であると答える生徒の割合が<br>A　９０％以上<br>B　８５％以上<br>C　８０％以上<br>D　８０％未満 | C<br>（８４．８％） | Cとなった要因として、昨年度よりも読書意欲を喚起する取り組みが少なかったことが考えられる。進路実現につなげる取り組みはこれまで同様に実施したため、３年生では「よくあてはまる」の回答が20.5ポイント向上した。2年生は微増。特に1年生への仕掛けを考えたい。 |
| | ④教科会議で各種の試験・模試等のデータを分析して生徒の状況を的確に把握した上で、授業や補習で指導する内容を検討する。幅広い進路選択に対してきめ細かく指導し進路実現を図る。 | 【教員】入試問題を念頭に置いた教科指導の改善に取り組んでいる教員の割合が<br>A　８０％以上<br>B　７０％以上<br>C　６０％以上<br>D　６０％未満 | A<br>（８６．９％） | 多くの先生が共通テストを中心とした入試問題を念頭において教科指導の改善に取り組んでいる。教科指導の改善には日々の評価や模試の成績データ等の分析による客観的な生徒の現状把握も必要である。教科会議を軸に現状を確認しながら指導法等の検討を充実させ、指導の底上げを図る必要がある。 |
| 学校関係者評価委員会の評価 | | 今回の地震により経済状況の変化など、この後の進路に影響が出る生徒もいると考えられる。さまざまな生徒に対応出来るように指導してあげてもらいたい。図書館で新聞を活用することで地域の情報なども得ることができて、総合的な探究や進路の選択、実現にも役立てられるのではないか。 | | |
| 評価結果を踏まえた今後の改善策 | | 奨学金等の案内や相談を丁寧に行うことで、震災による生徒の進路選択への影響を極力減らすよう努める。また、読書に限ることなく、新聞の活用も視野に入れ、活動内容を検討していく。 | | |

| 重点目標 | | 具体的取組 | 実現状況の達成度判断基準 | 集計結果 | 分析及び改善策（成果と課題） |
|---|---|---|---|---|---|
| ４ | 保護者や地域から信頼される学校づくりの推進<br>・働き方改革への意識を高めながら業務改善を組織的に推進する。<br>・学校公開、ホームページ、学校だより、マスメディア等によって広報活動の充実を図り、本校の教育活動の理解が深まるように努める。<br>・中学校の生徒や保護者に本校の教育活動の特色や魅力を伝え、本校への志願者の確保に努める。 | ①教員が業務効率化を進めながら、教育効果を高めるために組織的な改革に取り組む。 | 【教員】学校が組織的に業務効率化を進めていることにより、業務効率化が進んでいると実感している教員の割合が<br>Ａ　７５％以上<br>Ｂ　６５％以上<br>Ｃ　６０％以上<br>Ｄ　６０％未満 | Ｂ<br>（６５．５％） | 情報共有をデータで行うなど、ICTを活用した業務の効率化を常に念頭に置いて取り組んでおり成果は出ている。一方、一定数の教員が業務に対して多忙感を持っており、組織として、業務の平準化を図る工夫が必要である。また、各行事のあり方についての議論を深め、めざす生徒像に見合う行事の精選やスリム化を検討する必要がある。 |
| | | ②各課・学年と連携して教育効果を高める情報を保護者に提供し、学校と保護者が一体となるように、学校行事等への参加を積極的に呼びかける。 | 【保護者】PTA総会、PTA教育懇談会、教育ウィーク等年間を通して生徒や学校の様子を見に来校した保護者の延べ人数が<br>Ａ　５５０人以上<br>Ｂ　４５０以上<br>Ｃ　３００以上<br>Ｄ　３００未満 | Ａ<br>（６４６人） | 2年連続で170名増加しＡとなった。コロナ感染症が5類に移行されたことは大きな要因の1つであると考える。特に来校者が増加した行事は文化祭と2年生進路ガイダンス、教育ウィークの期間であった。 |
| | | ③ホームページの内容を充実させ、本校の教育活動の内容を保護者に理解してもらうとともに、学校配信メールによる情報提供の充実を図る。 | 【保護者】ホームページや学校からの通信文書により、教育活動が分かりやすいと感じている保護者の割合が<br>Ａ　９５％以上<br>Ｂ　９０％以上<br>Ｃ　８５％以上<br>Ｄ　８５％未満 | Ｂ<br>（９３．７％） | R4は上半期、下半期合わせて92.4％に対し、R5は94.4％であった。HPのアクセス数/日で比較すると、R4は289.6、R5は417.9と約128件増えており、以前よりもよく見てもらうことができている。メール配信による情報提供の質を向上させていきたい。 |
| 学校関係者評価委員会の評価 | | | 能登の少子高齢化、震災による人口流出など、定員確保が課題となってくる。中能登町唯一の公立高校として町の広報誌や、最寄り駅など様々なところと連携して活動していって欲しい。 | | |
| 評価結果を踏まえた今後の改善策 | | | 地元広報誌について、今後も町と連携を図り継続的に実施したい。また、駅などとの連携について現在は華道部が生け花の展示をしているが、更なる活動を模索し、保護者や地域から信頼される学校づくりに繋げていきたい。 | | |